三巻本『色葉字類抄』前田家本複製本使用上の注意

佐々木　勇

一、本稿の目的

本稿では、三巻本『色葉字類抄』前田家本の複製本使用にあたって注意すべきことがらを、字音注を例に述べる。

三巻本『色葉字類抄』前田家本を採り上げるのは、日本語史研究上の重要文献であるばかりでなく、文学・歴史学等でも、古代の漢字・漢語の読みや意味推定の基本的工具として活用され、『日本国語大辞典』などの大型辞典にも引用されているためである。

本稿の指摘と同様のことがらは、他の複製本にも存する。その一端は、すでに述べた（佐々木（二〇一六）。注1）。この『色葉字類抄』前田家本を含めた複製本を比較した佐々木（二〇一六）は、佐々木担当授業で複製本を使用する学生のために、題目の通りの「複製本使用上の注意」を記したものであった。そのため、挙例もごく僅かにとどめ、少部数発行の学内誌に掲載した。

ところが、これがリポジトリ公開されると、学外の研究者から反響があった。

そこで、『色葉字類抄』前田家本複製本の字音注について、筆者が気づいた例をすべて挙げることを本稿の目的とする。

これは、「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」における『色葉字類抄』前田家本の漢字音データ入力に際して気づいたものである。本稿で挙げた例以外にも、類例は存することであろう。

なお、本稿は、複製本の欠点をあげつらうものではない。以下に具体例を挙げるとおり、いずれの複製本にも長所がある。起筆に当たり、この点を明記する。

本稿のはじめに、三度に亘って複製本を刊行してくださった前田育徳会に対し、心中から御礼申しあげたい。

二、三巻本『色葉字類抄』前田家本の複製本

1．三種の複製本

現在、前田育徳会（尊経閣文庫）は、原本の状態を考慮し、三巻本『色葉字類抄』の原本閲覧を許可していない。ただし、「職員が調書用に撮影したデジタルカラーデータ」を、職員が見守る中、尊経閣文庫のパソコンで閲覧することは可能である。

三巻本『色葉字類抄』前田家本は、複製本刊行のために、三度、撮影されている。それぞれ別の写真であることは、尊経閣文庫に確認した。

三度撮影された写真に基づき、左三種の複製本が刊行された（注2）。

a．『色葉字類抄』（一九二六年、育徳財団、尊経閣叢刊）。

この複製本公刊により、色葉字類抄（前田本）の研究は、大きく前進した。現在入手困難であるものの、国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/にて閲覧可能である。二〇二二年十二月から、同一複製本三本（わ 095-11・813.1-Ta946i-i・W57-31）の「高解像度」画像が公開されている。

その後、研究の進展に伴い、朱筆の声点・合点等を正確に区別したい、という要請が生じた。その要請に応え、左の複製本が刊行された。

b．三巻本『色葉字類抄』（一九八四年、勉誠社）。

この本の前田育徳会尊経閣文庫「色葉字類抄 新印の辞」には、「機有らば、更めて朱刷りを入れる影印を」と「久しく考へて来た」と述べられている。

c．三巻本『色葉字類抄』（一九九九年、八木書店）。

これも、新たに撮影された写真に基づくことは、前田育徳会に確認した。巻頭の前田育徳会尊経閣文庫「例言」では、「墨・朱二版に色分解して製版、印刷した。」とある。

2．複製本の朱点

複製本b・cともに、墨で刷った後、朱刷りを重ねている。

その労により、モノクロの複製本aでは原本の朱声点が薄れて確認できない合点・声点等の朱筆を、利用者は確認できるようになった。

しかし、中には、朱刷りが落ちていたり、見えにくい箇所が有る。

佐々木（二〇一六）では、次の三例を挙げた。

a［尊経閣叢刊版］　b［勉誠社版］　c［八木書店版］

①

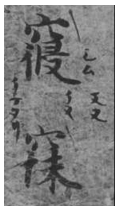
a［尊経閣叢刊版］

b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（上4ウ3）

②



a［尊経閣叢刊版］

b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（上6オ7）

③

a［尊経閣叢刊版］

b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（上13ウ1）

①は、aでも認められる去声点がb勉誠社版で朱になっていない例である。

②は、c八木書店版では、下字への合点が小さく、薄い。

③は、c八木書店版は「放」の去声点を認めていない。原本でも極く薄い朱点を残すのみである。aには、その影がごく薄く認められる。

①②③のいずれも、a尊経閣叢刊版であれば、原本の姿を確認できる。

右のような現象がなぜ起きるのか。

それは、「二色刷」の朱筆は、カラー写真を見ながら手で入れるか

らである（注3）。

この点がわかりやすい例を追加する。

④

a［尊経閣叢刊版］

b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（巻上107ウ1）

原本では、「閑」の右下に小さな朱点が有る。

aでは、この朱点が文字に重なって見えない。

bは入声点の位置に大きく加点されている。右下の朱点は入声であるという認識がこの位置に加点させたもの、と思われる。

cの右下朱点は、原本の朱点位置よりやや上に有る。

この原本朱点は、見開き反対側108オ8「閑」の平声点が、本を閉じた時にわずかに移ったものである。

次も類例である。

⑤

a［尊経閣叢刊版］

b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（巻上109オ7）

「力」の入声点の右にもう一つ、小さな朱点が有る。この朱点も、見開き反対側108ウ1「門」の平声点が移ったものである。

このような移りの点は、言語研究の対象とはならない。

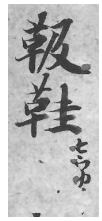
3．原本の補修

a尊経閣叢刊『色葉字類抄』出版後まもなく、原本の補修が行われた（注4）。

この原本補修によって、見えなくなった箇所が生じた。

⑥

a［尊経閣叢刊版］



b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（下47オ7）

音注「サウカイ（上上上平）」の「イ（平）」が、複製本b・cでは見えない。なお、b・cの「カ」に加点された朱の上声点も、原本より僅かに下がっている。

⑦

a［尊経閣叢刊版］

b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（巻下49オ1）

音注「サイ（平平）」の「イ」が、b・cでは見えない。「イ」に加点された平声点のみ残ったため、「災」への入声点であるかのように見える。

また、漢字の周囲に加点されている声点が補修によって見えなくなった例が多い。左に二例のみ掲げる。

⑧

a［尊経閣叢刊版］

b［勉誠社版］

c［八木書店版］

（上32ウ7）

a［尊経閣叢刊版］　b［勉誠社版］　c［八木書店版］

⑨

（上47ウ7）

⑧は「判」の平声点、⑨は「暴」への去声点内側一点が、b・cでは見えなくなった。

一方、補修の結果、見えるようになった訓点も有る。

a［尊経閣叢刊版］　b［勉誠社版］　c［八木書店版］

⑩

（下108オ1）

複製本b・cでは、⑩上字の仮名音注「セウ」が見える。a尊経閣叢刊の写真撮影時点では、仮名音注「セウ」部分の紙が虫損によって浮き、上に折れていた。aに基づく『色葉字類抄研究並びに索引』（一九六四年、風間書房）は、この箇所の振り仮名を「□□カチ」（索引篇・一九二頁下段）としている。

このように、三種の複製本は、それぞれに有用である。

三、複製本三本の異同

右に、複製本の異同十例を挙げた。

複製本三本における異同例全体の中、最も多いのは、a尊経閣叢刊版では確認できる訓点が、b勉誠社版とc八木書店版とでは、見えない例である。

尊経閣文庫の御教示によると、一九二六年に複製本aが刊行されてから、複製本bが出版される一九八四年までに、原本が補修された。その補修紙によって訓点が隠された例が多い。

左に、本稿の筆者がこれまでに気づいた複製本三本の異同例を挙げる。

現在、三巻本『色葉字類抄』前田家本の研究は、複製に基づくしかないため、注意すべき例として掲げるものである。複製本の優劣を言うものでは、決して無い。

これまでと同じく、a［尊経閣叢刊版］・b［勉誠社版］・c［八木書店版］とし、複製本で判読できるものを○、判読できないものを×とすると、異同の組み合わせは左となる。

1　a　○　b　×　c　×
2　a　○　b　○　c　×
3　a　○　b　×　c　○
4　a　×　b　○　c　○
5　a　×　b　○　c　×
6　a　×　b　×　c　○

以下、この項目ごとに用例を挙例する。以下の挙例では、声点が見えない複製本が有る場合は声点のみを、仮名が見えない複製本が有る場合は仮名のみを記した。訓点の詳細は、各複製本でご確認いただきたい。

1．a　○・b　×・c　×

返（平）閇（平濁）（上52ウ7）
扁（去）鵲（入濁）（上53オ1）
李（上）門（平）（上75ウ7）
觥（上）（上76ウ7）
胡（平）皃（去）（上86ウ7）

㝡（平）（上91ウ7）
高（平）匡（平）（上109オ1）
寒（平）（下6ウ1）
杌（平濁）子（下43ウ1）
相（平）節（入濁）（下52ウ7）
侯（平）（下57オ1）
凝（平濁）濁（入濁）（下63オ7）
日（入濁）（下90オ5）
薤（平）賓（平）（下119ウ7）
随（去）近（平）（下119ウ7）
幸（去）魂（下44ウ7）

最後の「幸」への去声点は、補修後のb・cでも、わずかに見える。

佳良（カリヤウ）（上116オ1）
疏（ソ）（上60オ2）

補修後の複製本b・cでは、振り仮名「カ」「リヤウ」「ソ」が見えない。

先掲例⑥〜⑨も、ここに入る。

2．a〇・b〇・c×

次例は、複製本a・bには見え、cでは声点が朱になっていない。先掲例③は、ここに入る。

遊（平）放（去）（上13ウ1）
紅（平）葩（平）（上21ウ2割注）
返（平）閇（平濁）（上52ウ7）
解（上）纜（上）（上63ウ6）
蒙（平）籠（平）（上85オ1）
海（平）道（平濁）（上106ウ7）
降（去濁）伏（入濁）（上107オ1）

3．a〇・b×・c〇

次例は、複製本a・cには見え、bでは声点に朱が加えられていない。先掲例①は、ここに入る。

苛（平）（上102ウ7）
額〈カ（上濁）ク（上）〉（上100ウ1）
侯（平）（下57オ1）

4．a×・b〇・c〇

先に例⑩として画像を挙げた例は、ここに入る。

隠（上）文（去）（上13ウ7）
發（入）露（平）（上47オ7）
樂（入濁）器（上濁）（上109オ7。「器」に近い声点）

右の声点三例は、原本ではごく薄くなっているものの、確かに存する。

複製本aでは、これらの声点は確認困難である。

複製本bでは、これらの声点が薄いことはわからない。

複製本cは、朱声点の大きさ・濃さの違いを原本の状態に近づけている。bの出版からcの出版までの十五年間で、二色刷の技術が向上したのであろう。

𨻰（上）（下4ウ5）

この上声点は、複製本aでは濁声点のように見える。複製本b・cによって、外側の点が朱点ではないことが知られる。

5．a ×・b〇・c ×

先掲例③が、ここに入る。

6．a ×・b ×・c 〇

ここに入る例は、指摘できない。複製本 c は、朱点の認定に慎重である。

四、むすび

以上、三巻本『色葉字類抄』前田家本の字音注について、筆者が気づいている複製本三本の異同例をすべて挙げた。

挙例から知られるとおり、三本の複製本には、それぞれに長所が存する。最初の複製・尊経閣叢刊でなければ知られない字音情報は、多い。

和訓や義注に着目しても、類似の異同が存するし、三巻本『色葉字類抄』前田家本以外の複製本についても、同様である。

原本保存のため、研究はまず複製本で行なうべきである。

しかし、複製本で不明の点は、原本で確認する必要が有る。研究の基礎となるデータベース作成においても、原本を確認することと、利用者が原本に遡るための用例所在明示とが必要である。

注

（1）佐々木勇「古典複製本使用上の注意」（「論叢 国語教育学」12号、二〇一六年七月）。http://doi.org/10.15027/40784

（2）『色葉字類抄研究並びに索引』本文篇（一九六四年、風間書房）は、『色葉字類抄』（一九二六年、尊経閣叢刊）からの再複写である。

（3）この点は、尊経閣文庫に確認した。前田本『色葉字類抄』以外の二色刷複製本朱点についても同様である（佐々木（二〇一六）、参照）。

（4）補修時期について、前田育徳会に問い合わせ、「収蔵品の補修につきましては、昭和30年代以前の修理に関してはほとんど資料が残っていません。おそらく、三巻本「色葉字類抄」は、尊経閣叢刊が刊行されて間もない時期に補修が行われたと推測されます」、との回答を頂いた。

［附記］本稿は、科学研究費補助金（課題番号：19K00650、22H00665）による研究成果の一部である。

（広島大学）